

自閉症に関する仮説の検討

朴 高哲

東京大学大学院総合文化研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員(DC2)

自閉症者は他者の心が分からないのだろうか。また、そうだとしたら、自閉症に特徴的な諸症状は、他者の心が分からないという症状の結果生じているのだろうか。本発表では、こうした可能性を検討するために、他者の心の理解(マインドリーディング)のメカニズムに関する仮説である理論説やシミュレーション説によって自閉症の諸症状を説明できるかどうかを検討する。より具体的に述べると、自閉症者がマインドリーディングに失敗していると仮定してみて、自閉症の諸症状の原因を、理論的他者理解能力の欠如あるいはシミュレーション的な他者理解能力の欠如のいずれによってもっともらしく説明できるかを検討したい。

一つ目の検討課題は、自閉症がマインドリーディング以外の障害も伴うことをどう説明するかである。彼らは、マインドリーディングとの関連が一見なさそうな、フリ遊びの少なさや、「ハノイの塔」課題の失敗に代表される実行機能の障害ももっているのだ。

この課題について、理論説論者は、大きく分けて二つの説明戦略を取りうる。一つはレスリーのようにフリ遊びの欠如といった症状を「他者知(マインドリーディング)の失敗」から説明する戦略である。もう一つは、カラザースのように他者知だけでなく自己知についても理論的な解釈を通して獲得されるという立場の理論説論者ならとりうる戦略であり、「自己知(メタ認知)の失敗」にもとづいて諸症状を説明しようとする戦略である。

それに対して、他者の心の理解には想像力が必要だと考えるシミュレーション説は、想像プロセスそのものか、想像プロセスの入力と出力における失敗にもとづいた説明を試みることになるだろう。

第二の課題は、バロン＝コーエンらによる最初期の実験から、アン・サリー課題のような誤信念課題を通過する自閉症児が少なからず存在することが知られていることをどう説明するかである。これは一見すると自閉症者がマインドリーディングが可能であることを示唆し、さきほどの仮定の妥当性を疑わせるものだ。

このような形で自閉症の説明を試みることにより、しだいに影響力を失ってきているように見える「自閉症＝マインドリーディングの障害」という仮説の説明力を再考することができる。同時に、自己知(メタ認知)と他者知(マインドリーディング)の関係についての理解を深めることができるだろう。